

「豊北焼」の技術について

宮田佳典

はじめに

最初にちょっとお断わりしなきゃいけないのが、今回豊北焼の復興に携わらせていただいているんですが、まだ試作中の段階で、完成もしていないのであまりえらそうなことは言えないんですね。内容の濃い話もできませんし、パワーポイントを使って説明するようなこともありませんので、世間話程度に聞いていただければありがたいなと思っています。よろしくお願いします。

1. 自己紹介

僕は萩で修行してたんですが、そこから独立するときに、僕も妻も実家が小倉なものですから、萩と小倉の間と思って、場所を探したんですね。それでいろいろ考えて、豊北町になって、窯を作ることになったんです。

それで、豊北焼ですが、豊北焼っていう言い方もすごく曖昧で、今は名称で製品を限定できないような状況ですから、豊北町で焼かれたやきものの総称として、単純に豊北焼って言い方をしています。豊北町に来た当初は、豊北町のやきものの存在も知らなかったんですが、当時の歴史民俗資料館に行ったときに、いろんな古い道具なんかと一緒にやきものが置いてあったのを見たんですね。そのときは、どこで焼いてるのかな、という感じで、まあ町内で焼いてたとしても、小さい窯元が2〜3軒ぐらいあったのかな程度のことを気軽に考えてたんですが、町内を車で移動してるときに、今ならわかるんですけど、大山田窯を見つけたんですね。場所は阿川のローソンのちょっと奥のほうに行ったところですけど、当時は大山田窯の窯跡があって、それが大体30メートルぐらいの巨大な窯跡で、山の斜面の下から山の頂上までずっと窯がつながっているような、そしてやきものを焼く部屋も一部屋が6畳以上あるような規模でした。こんな広い部屋どうやって焼いたんだろうというぐらい大きな窯跡で、それでちょっとびっくりしてたんですね。

そしたら大山田窯を整地するときに、県の調査が入って、広報に詳しく情報が出ていたんですが、それを見て、町内に14も窯跡が確認されていたことや、かなり大きな窯跡だったということを知ることになりました。それで少し興味が出てたんですが、豊北町には、同じくやきものをされている西慶寺さんがいらっしゃったんで、復興というような仕事は西慶寺さんがやられたらいいなっていうふうに個人的には思ってたんですね。だけど、西慶寺さんがああいうふうになられてしまったから、僕がちょっとっていう気持ちを思い始めたときに、ちょうど土井ヶ浜のミュージアムで豊北焼の展覧会がされていて、それを見たときに、やっぱり復興したいと思ったわけです。

2. なぜ豊北焼（北浦焼）の復興を始めたか

よく何で復興するんだとか、理由がどうだとか聞かれるんですけど、正直いってわかんないんですね（笑）登山家が登ったことない山を目の前で見たら登りたくなる、みたいな感じに近いような気は

するんですけどね。それで、そういう気持ちで、当時の土井ヶ浜のミュージアムで学芸員さんに相談したら、窯跡に連れて行っていただけるということで、何か所か窯跡と一緒に回らせていただきました。普通の都会だと住宅化して、窯跡なんかはまったくなくなってるんですけど、幸いここはまだ窯跡が残っていて、物原（失敗したやきものを捨てる場所）がそのままあるんですね。しかも、当時のやきものの失敗作の破片が、山のようにあったんです。そういうのを見ると、やっぱりやきもの屋としては、ちょっとテンションが上がるというか、興奮するところがあって、その破片を持って帰って、家で毎日見続けていたんですね。そしたら、やっぱり復興しなきゃいけないなっていう意欲にかられて、それから決意した次第です。

3. 豊北焼の土、技法、焼きについて

それでは、少し豊北焼の土や技法、焼きについてお話させていただきたいと思います。復興を始めたころは、豊北の生產品もたくさんあるし、窯跡もたくさん残っていますし、失敗したやきものの破片もたくさんあるし、当時の言い伝えみたいな話もいくつか残っていたものですから、わりと簡単に復興できるかなと思ってたんですね。だけど実際やってみると、途中で一回復興してますが、窯自体が最後に廃業してから 80 年ぐらい経っているものですから、わかるようで本当に何もわからないっていうのが現実でした。それが現在の状況ですね。

たとえば、歴史民俗資料館さんのほうで保存していた、当時豊北焼に使っていたという土をちょっと分けてもらって、それから自分で陶土（やきものになるような粘土の状態）を作って、その成分分析を山口県の産業技術センターさんをお願いしたんですね。それで、その成分が一致すれば、そこでとった土だっていうのがわかるんですけど、出てきた陶片と粘土の成分が微妙にちがうので、これはどういうことだっていうことになったんです。

普通は、こういう磁器のいい土っていうのはポケット状にあって、山の中に、約 1 メートルぐらいに玉状に埋まってあるんですよ。だから粘土の成分が微妙に違うのは、そのいい土の横のほうを知らないでとってきたのかな、とか。掘った土によそから持ってきた別の原土をブレンドして使ってたのかなとか。ただ単にその人勘違いされてるのかなとか。そういうように、中途半端に情報があるぶんだけ、逆に混乱することがいっぱい起こったんですね。なので、あまりはっきりしたことが今は言えないんですが、現在わかっているだけの情報を少しお話させていただきたいと思います。

さっきも言いましたが、豊北町では 14 ぐらいの窯跡が確認されていて、町外でも、下関の長府のほうとかにもかなり窯跡があったのはもうわかってるんですね。だから、今の下関市っていうのは、かなり大きな産業としてやきものを焼いていたのは事実なんですけど、その中でいくつか豊北町の調べた窯について、説明させていただきます。

基本的には半磁器といって、磁器と陶器の間ですね。2 つの土を半分ずつぐらい混ぜ合わせて土で焼かれているやきものです。絵付は染付です。呉須っていうんですが、コバルトで絵を描くもので、よく 100 円ショップでも売られているような白い器に紺色の絵付の器ですね。基本的にはそういうのが大半なんですけど、それ以外の、田耕の原窯というところでは、色絵といって、赤とか色がついた絵付をしているものも出現いたしております。また、大山田窯のやきものは半磁器でなく陶器ですね。

萩焼に近いようなものを、たくさん焼かれているというのがわかっております。このように、本当に多種多様なものが出ていて、一つの町内で本当にいろいろなものが焼かれているのは全国的にもめずらしいですね。

それから、各地から出土した陶片を、山口県の産業技術センターさんで、蛍光X線を使って成分分析をおこなってもらってるんですが、その分析結果からも、ただ同じ土をみんなで分けたんじゃないという結果が出ています。今だと、サンプルとして成分分析したのが、中原窯、境下窯、原窯。原窯は、色絵じゃなくて、染付のほうを分析しました。それから飯の山窯ですね。これは阿川にあるんですが、殿様専用という感じではないですが、阿川毛利の御用窯で、藩が材料を提供してくれていたような優遇されている窯ですね。あとは大山田窯です。

それで、各窯から出土したものの成分分析したんですが、中原窯と境下窯の場合は、町内に詳しい方はおかわりでしょうが、すごく場所も近いんで、造形的には交流があったみたいですね。なので、同じような成分で、少し火に弱いような半磁器土を使っています。すごく似た感じになってますね。だけど原窯は、半磁器ですがちょっと長石分が多くて、火に弱いというか、かなり低い温度でも焼けるような成分になっています。

飯の山窯は、藩が土を確保したせいか、はっきり状況はわからないんですけど、純粋な磁器ですね。有田焼みたいな白い土に、データの的にはちょっと近いかなと思います。それから大山田窯では磁器も焼かれていたんですけど、僕が調べたものは、もう陶器ですね。データの的には萩焼に近いような状況のものです。大山田窯がつぶされたときに、窯の中に素焼きしたものがいっぱい残ってたらしいんですね。それで、今回その陶片をもらって焼いてみたんですが、その感じではやはり陶器も焼いてたのかなと思います。はっきりはわかりませんが、そういうような状況です。

次に焼き方なんですが、さっき言った大山田窯の再焼成した陶片ですね。生焼けのような、完全に焼けてなくて失敗した陶片を、自分で釉薬をかけて焼いてみたんですが、結果をみると、最初に思っていたよりもかなり低い温度で焼かれてるということが分かりました。大山田窯はさっき言ったように6畳以上もあるような広い部屋ですから、全部高温になるっていうのはかなり困難ですね、僕は大きさでいうと、2メートル×3メートルぐらいの窯が常識的だと思うんですけど、そんな大きさの窯を焼くのに本当に苦労するんです。なので、6畳ぐらいの広さっていうのは、どれだけの時間がかかったんだろうと思いますね。

また、窯焚きの大変なところっていうのは、最初から火がぼっと焚くんじゃなくて、最初はちょろちょろと、たき火に毛がはえた程度から始めるんですね。それからどんどん徹夜で焼いたりしたら、だんだん疲れてくるじゃないですか。疲れてくるころ温度はどんどん上がっていくんですが、温度が高くなると、逆に焚き方がデリケートになって神経を使うんで、本当に疲れる作業なんです。それがあれだけ大きいとなると、やっぱりかなり大変だったんだろうなっていうのは予測ができます。そういう意味でも、やっぱりちょっと低い温度でも焼いてたんじゃないかと思います。6畳ぐらいあれば前のほうは温度が上がるんですけど、裏のほうまでちゃんと温度がいくようにするのは難しい。かなりゆっくり、じっくり焚かないといけなし、難しい技術がいります。なので、完全に温度が上がらなくても焼けるようにする、ということまで考えてやってたんじゃないかなっていうふうには思いま

す。

それから、普通、磁器系っていうのは、還元といって強く焼くんですよ、登り窯だったら煙をどんどん出して燃やす。それはどうして燃やすかっていうと、薪がどんどん窯の中に入ると、火はもっと燃えたいんですね。だけど、窯の中にある酸素はある一定の量しかないですから、そのうち薪が窯の中の酸素をほとんど燃やしちゃうんです。だけどそれでもまだ炎が燃えようとするから、次は釉薬や土の中にある酸素、これまで燃やそうとしてそれを使って燃える。そうするとやきものの色が変わります。鉄を焼くと青くなって、さびると赤くなる原理と一緒にですね。なので、還元で焼くとやきものの中の鉄分が青く発色します。

だけど還元は難しくて、窯の中に酸素がないのに薪をどんどん入れても、温度が上がらないんですよ。だから酸化っていう焼き方のほうが楽ですね。本当は煙が出てきてから薪を入れるのをやめて、薪を完全燃焼させながら焼いてあげると、酸素が足りてるんで薪もよく燃えるから温度も上がりやすいんですが、大山田窯のあれだけ大きい窯だったら、完全に還元をかけるのは難しかったんだと思いますね。テストで焼いてみた結果、やっぱりちょっと酸化気味で焼いたほうが、発色が近いっていうのがわかっています

それから、このやきものを作る文化、環境ですけれども、以前発表された文献なんかを読むと、多いときは、7、80人も職人を雇っているような窯が何軒もあったような、わりと盛んな産業だったみたいなんですね。それから当時の職人さんですが、御用窯や伝統窯っていうところは、窯ぐれって呼ばれるような流れ職人を雇うようなことはないんですね。だけど、豊北のその他の窯は、そういう人を雇わないとやっていけないんで、いろんな流れ職人が流入します。だから窯場は本当に多国籍というか、方言や風習、文化が違う人間が集まって作業するわけです。だから価値観もみんな違うし、今でいえば、同じ日本人と、アメリカ人、フランス人、ドイツ人、中国人、パプアニューギニア人がいる、そういうような状況だったと思うんです。そういう状況の中だと、お互いの価値観を押し付けても無駄になってくるんで、逆にルールみたいなものがゆるくなって、自由な雰囲気っていうのが生まれてくると言われています。

伝統窯なんていうのは、やっぱり一子相伝みたいなことを言われていて、親から子供にしか技術を伝えないということですね。窯元によっては、釉薬の調合は本当に一子相伝で、長男だけで、次男には絶対に教えないっていうところも残っています。だから、その技術が漏れないようにしなきゃいけないわけで、昔の釉薬をつくるときのやりかたは、杓計りっていうんですね。大体釉薬を作るときは、藁の灰や木の灰、長石などを水で溶くんですが、その濃度をあわせて、例えば、藁を10杯、長石を2杯、灰を3杯いれるとします。それで作れるんですが、外で、ひしゃくをすくうときの音を聞かれて、何を10杯、何を2杯入れたっていうのがばれてしまうといけないんですね。だから、一旦ひしゃくですくったものを元に戻して、音の数をごまかすぐらい気を使ってやってたりと、そのぐらい厳しくやってるところが今でも残ってます。

だけど、そうなってくると、やきものっていうのは、ただ単に技術的な問題じゃなくて、精神的な環境や雰囲気^{さくゆき}が作行に影響してくるんですね。伝統窯っていうのは、確かにきちんとしたものを作るんですが、やっぱりそういう固いルールの中、美意識や技術が、ひとつの中でやるんですね。だから

確かに高級感はあるんですけど、プライドが高すぎて、ちょっと感じの悪いところがあるっていう気がしますね。

それに比べて民芸っていうのは自由につくるし、いろんな職人さんが出入りすることによって、技術的な交流がお互いにあったりするんですよ。僕が出た窯なんかもそうだったんですが、そこは先生っていう人がいなくて、経営者がやきものを作るのにこだわって、昔ながらのやきものでやりたいといって、やっているところなんですね。なので、職人さんを雇ってやっているんですが、職人さんっていうのは、ちょっと気難しい人が多いみたいで、入れ替わりが激しい感じだったんですよ。だからそのたびに新しい技術が入るんですが、窯焚きにしても、みんな焚き方が違うんですね。僕はそれを横で見てたんで、やっぱりすごく勉強になったっていうか、勉強の効率がいいっていうか。自分にあった焼き方とかもすごく学びやすかったし、窯焚きに対して柔軟な考えをもてるようになったんですね。だから逆に、僕はきちっとしたものは作れないんですけど（笑）そういうことに対して柔軟に対応できる能力っていうのはついていると思ってるんですよ。

やっぱり、伝統窯なんかの、先生がいるところで厳しく指導されて出てきた人は固いんですね。一緒に窯焚きを手伝いに行くと、窯焚きはこうじゃないといけない。それ以外はダメだっていって、絶対聞かないんですよ。だけど、そういう固さみたいなものが、逆にいうと作品の気品になって現れるかもしれないですけどね。

その点、豊北焼は、逆の意味でも自由さみたいなのが出ていると僕は思います。ちょっとのびのびしていて、大雑把だったり、つくりが粗いところがあるんですけど、粘土自体を自分で掘っていって、原土から粘土を作って、自分で薪を割って、釉薬を配合して、自分で焼いて、色絵は型紙を使って、転写といってコピーみたいなことをしているものもあって、そういう大雑把な部分もありますが、他の下地をきちんとやっている。ただ単に大雑把じゃなくて、そこが味わいとして伝わってくる力のほうが、僕はあると思ってやっているんです。

4. 豊北焼の再現と復興の方法

それから、今復興するにあたってどうしているかというのと、産業技術センターさんのほうで調べてもらった豊北焼のデータにあわせて、今一般で流通している土石類ですね、そのデータをとって、これにこの成分をもうちょっとたしたら、豊北焼の原土に近くなるんじゃないか、というような調整作業をしているところです。

正直にいうと、流通している粘土、陶土と、原窯の陶土の数値がすごく似ているので、そのまま使っても大丈夫という状況なんですけど、ちょっと味気ないんで、今は中原の境下の土に近いものを試作しているところです。

それから、その作業をしているなかで少し驚いたことがあって、今は情報がすごくたくさんあるのに、技術的なことや化学的なことをふまえて、ベストな状況での陶土がつくりやすいんですね。反対に、当時の人はそんなに情報がなかったんでしょうけど、そういうなかでも土ができてたんです。だからやっぱりそういうことで、当時の人には陶土に対する見識の深さがあった。僕らはちょっと甘やかされてた時代ですね。やっぱり情報化社会なんで、単純に言えば、ネットで調べれば簡単に手に入っ

てしまうんですが、当時の人のそういうところが非常にすごいなと思っていますね。豊北焼を研究していると、そういう気づきがいくつか出てきます。

5. 今後の豊北焼

今後は、豊北焼に携わる人間が一人じゃなくて、誰かがまたやることで、豊北焼自体が一人歩きしていけるような状況になればいいなと思っています。僕自身は、豊北焼はこういうもんだって決めるんじゃなくて、多少成分が違って面白かったらいいんじゃないか、ぐらいのゆとりを持って、豊北焼っていうのには関わっていきたいと思ってるんですね。だから、理想ですが、別の人が同じようにやってくれたりして、今度はこんな豊北焼が焼かれたというふうにいつかなればいいな、と思ってやっているところです。

すいません、本当に内容の浅い世間話みたいなもので申し訳ない。ご清聴どうもありがとうございました。

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

研究紀要

第8号

発行年月日	2013年3月
編集・発行	土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 〒759-6121 山口県下関市豊北町神田上891-8 TEL 083-788-1841・1842 FAX 083-788-1843
印刷	株式会社吉村印刷 〒750-0004 山口県下関市中之町5-9 TEL 083-232-1190 FAX 083-232-1189
